



2023

学校だより **本荘** *Smile*

令和5年度 第15号

令和5年8月15日

熊本市立本荘小学校

校長 西川 英臣

1学期の出来事より⑤ カブトムシから命の大切さを 教頭先生ありがとう



この写真わかりますか、大変貴重な写真です。実は、羽化したばかりのカブトムシの写真です。このような場面、そう簡単に遭遇するものではありません。しかし、今年の本荘小学校は、各学級にこのチャンスがいっぱいあったのです。なぜでしょう。

それは、全クラスにカブトムシのさなぎが4匹ずついたからです。力を貸してくれたのは、植村陽一教頭先生です。植村教頭先生は、知る人ぞ知るカブトムシ飼育の名人なのです。今回は自宅からカブトムシの幼虫をたくさん持ってきてくださいました。それを各学級に配ったのですが、ただでは配っていないのです。校長先生の虫眼鏡で紹介していますが、「まず4匹プレゼントするので、クラスで話し合って、自分たちで責任をもって育てるという約束をしてからもらいに来る」というルールがあったのです。さらには、夏だけの話ではなく、10月の時点で幼虫がどのくらいいるのかという、カブトムシにとって持続可能な社会づくりも目指した取り組みになっているのです。さすが、植村教頭先生ですね。カブトムシは、おもちゃでもなく道具でもなく、ちゃんと生き物であることを子どもたちに考えさせることからスタートするようにしてもらっています。さらには、先生に頼らずに、自分たちで育てていくという自治活動も視野に入っているのです。

どちらの時代がよいという話ではありませんが、昭和の時代は、自分たちで虫を捕って、意気揚々と自宅まで持ち帰っていました。でも、その後もあったのです。虫かごに入れて、えさの準備をしないとイケません。カブトムシやクワガタムシであれば、砂糖水と脱脂綿を準備しました。カミキリムシであれば、ミカンの木の枝と葉っぱを入れていました。セミは成虫の期間が短いので、一日で逃がすなど、子どもでしたが、自分たちなりのルールも決めていました。でも、世話が行き届かないと虫たちはどんどん死んでいきます。せっかく、貴重なミヤマクワガタを捕まえても、2日で死んでしまったこともありました。(裏面へ続きます)

悲しみにくれるのですが、その中で、命の大切さを教わります。虫を捕まえるということには、虫を育てていくという責任が伴うことを実感していくのです。

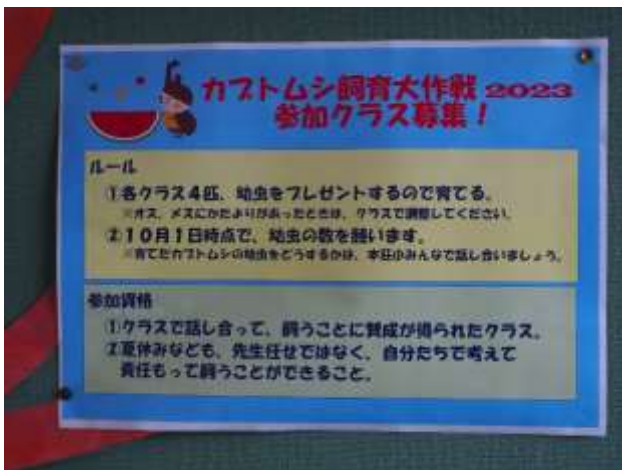
令和の子どもたちは、低学年の生活科の中で、虫を初めてさわるという子どもも多いと聞きます。さわれなかったり、虫の存在を知らない子どももいるのでしょうか。時代の変化というものはそういうものです。私たち昭和時代のものや、保護者の方々のような平成世代の方々、それぞれ社会背景が違います。虫に対する考え方も違って当然でしょう。だからこそ、令和の子どもたちには、今の時代に合った教育が必要なのです。

植村教頭先生のおかげで、各教室で成虫となったカブトムシたちは、次の世代の卵を残していただくことができました。夏休み中、新しく孵化した幼虫たちが職員室でのびのびと育っています。さあ、10月1日までに、どのクラスの幼虫たちが一番育つのか？楽しみにしながら職員室を眺めている校長先生です。(校長)

校長先生の虫眼鏡 「植村教頭先生の工夫 命の学習」

植村教頭先生からは、子どもたちに向けて、定期的にミッションが伝えられていました。命の学習ができるように工夫されています。すばらしいですね。

1 ファーストミッション



2 育て方の注意事項



3 さなぎになってからのミッション



4 羽化に向けてのミッション

